

井伏鱒二全集

第九卷

井伏鱒二全集

第九卷

筑摩書房

井伏鱒二全集第九卷

昭和四十二年十月二十日發行

著 者 井 伏 鱒 二

發行者 竹之内靜雄

發行所

東京都千代田區神田小川町二ノ八
筑 摩 書 房

電話東京 〇七六五一（代表）
振替 東京 四 一 二 三

印刷 株式會社 精興社
製 本 和田製本株式會社

目次

つくだ煮の小魚	三
かなめの生垣	五
紙風のうた	六
細カナリヤ	八
場面の效果	一〇
印度の譯詩	一六
悪　　戲	一九
鞆ノ津所見	二三
青　瑛　玕	二七
風貌・姿勢	三三
石　地　藏	四〇
日本漂民	五五
架空動物譜	六四
マリといふ犬	七九
いかさま病院	八三
國　　旗	八八

増富温泉場	八五
アラヤ殿下のこと	八八
田園記	九六
書畫骨董の災難	一〇三
山小屋の番人	一〇六
夏の狐	一一〇
素人野球試合の記	一二三
荒廢の風景	一二六
下田行	一二三
土	一三〇
はせ川	一三四
坪内逍遙先生	一三八
葉煙草	一四二
初めて逢つた文士	一四六
旅さきの食べもの	一五二
中島健藏に	一五六

肩 車	一六三
志賀直哉と尾道	一六七
釣鐘の音	一七三
甲州の話	一八〇
富士川支流	一八六
金 山 踊	一八九
噂	一九三
無人島長平	一九七
長平の墓	二〇三
静 夜 思	二〇八
樹 木	二一四
夏日お山講	二二〇
歳末閑居	二二四
軒について	二三六
天民翁記	二三九
所有權と保管品	二三一

戸山學校の森	三三五
なだれ	二四〇
上京直後	二四一
雞肋集	二四四
歳末非常警戒	三一九
二月九日所感	三四
逸題	三八
冬の池畔	三三〇
按摩をとる	三三二
寒夜母を思ふ	三三四
顎	三七
山の圖に寄せる	三三九
鳥	三四一
軍鶏	三四六
水鶏	三五三
三宅島のタイムイさん	三五七

玉泉寺	三六〇
七面山所見	三六五
山の宿	三七〇
ロシヤ屋の女給	三七五
牛込鶴巻町	三七七
芹つみ	三九一
三宅島所見	三九三
杉並區清水町	三九八
八束・斐の川	四〇〇
フジンタの瀧	四〇五
出前もち	四〇七
縁蔭	四〇九
螢合戦	四一一
さしでの磯	四一五
恵林寺	四二七
御坂上	四二〇

獵見物	四二六
土佐の高知	四三二
光琳の人物畫	四三四
龜	四三七
霞亭の觀梅詩	四四二
案內記	四五〇
日向高千穗	四五五
旅中友人の災難	四六一
月山日和城	四六八
五三郎君に關する記	四七五
三宅島噴火の當日	四九〇
解題	四九五

井伏鱒二全集

第九卷

つくだ煮の小魚

ある日 雨の晴れまに

竹の皮に包んだつくだ煮が

水たまりにこぼれ落ちた

つくだ煮の小魚達は

その一ぴき一ぴきを見てみれば

目を大きく見開いて

環になつて互にからみあつてゐる

鰭も尻尾も折れてゐない

顎の呼吸こきふするところには 色つやさへある

そして 水たまりの底に放たれたが

あめ色の小魚達は

互に生きて返らなんだ

かなめの生垣

かなめの生垣に寄れば

目に疑ふ 白き木瓜の花

私はマントの襟を立て

地に沿うてとぶみそざいを見る

紙風のうた

私の心の大空に舞ひあがる
はるかなる紙風 一つ

裏風をうけ

舞ひ落ち舞ひ落ちてひるがへる

絲のたわみは畦を越え

そこにかしこに枯枝に吹く

薄墨色の夢に刻んだ絲梓に

私は絲のたわみをたぐり寄せ

紙風のむくろを目にたづねる

舞ひあがれ舞ひあがれ

紙風 一つ

私の心の大空たかく舞ひあがれ